

龍族

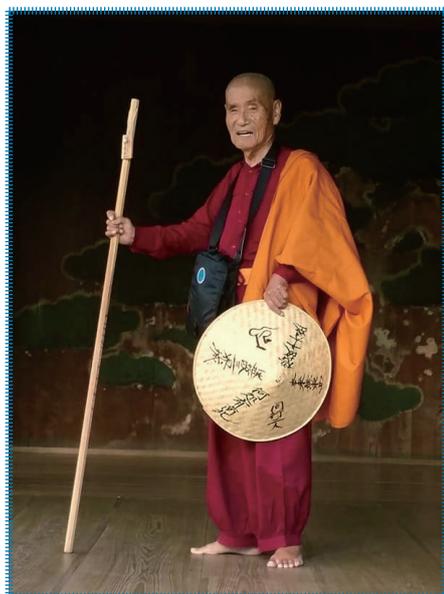
RYUZOKU
第25号

南天会
令和5年
4月14日

秀嶺はフエニックス”火の鳥”と成り
空を舞ぶなり今生きるなり

佐々井上人
4年ぶりの来日決定！

佐々井上人が4年ぶりに来日いたします。



来日企画①

龍族会議を行います。

私たちは佐々井上人から得度を受けた人たちを「龍族」と呼んでいます。度名を授かった方は多く、古くは40年以上前からいらつしやると伺っております。最近では佐々井の弟子として活動される方も多くなりました。佐々井上人に得度を受けた人、名前をいただいた人、師と仰ぐ人、佐々井上人の警咳に接する全ての人が集まり、その最期の遺告を受持する会になります。

龍族会議予定日

6月下旬 開催場所関東で調整中

南天会では2019年令和元年以来中断していた佐々井上人来日を再開いたします。

2014年の南天会発足以来、2015年、16年、17年、18年、19年と5年連続で来日を実現しました。しかし、2020年2月からのパンデミックにより移動が不可能になり、さらに9月には佐々井上人のコロナ感染など、日印を往来した活動が難しい状態が続きました。パンデミックの世界的な終息に合わせ例年通り本年5月下旬から7月初旬までの日本滞在を予定しています。ご高齢のこともあり、大きなイベントはなるべく控えながら健康に充分留意してまいります。

南天会交流会開催予定日

6月3日（土曜） 予定 東京四谷・真成院 住所 東京都新宿区若葉2丁目7-8

来日企画②

個別面会日を設けます。

本年度の来日では、体調などを考え大規模講演を少なくし、少人数での面会日を設けようと考えています。5〜10人ほどのグループでお申し込みいただき、少人数でゆっくりお話しできる機会にしたいと思います。お申し込みは南天会までお問い合わせください。

個別面会予定日

6月4日（日曜） 東京四谷・真成院

6月11日（日曜） 岡山・場所未定

6月26日（月曜） 京都・場所未定

詳細決まり次第順次南天会ホームページでご案内致します。

滞在費用のご支援をよろしくお願い致します。

滞在期間中の交通費、宿泊費等は南天会から支出します。滞在支援のご寄付をよろしくお願い致します。同封のゆうちょの振込用紙、またはクラウドファンディングサイトシンカブルにて受付けています。



シンカブル QR コード

佐々井大導師ご来日 光研詠十首

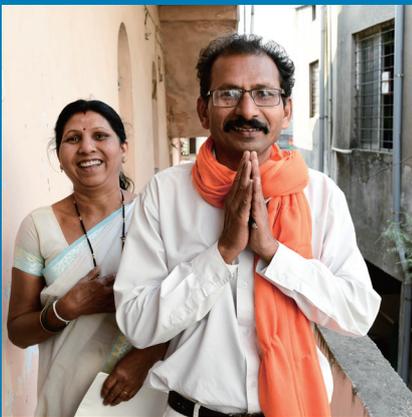
秀嶺はフエニックスニ火の鳥ニと成り空を舞ふなり今生きるなり
 インドには権謀術数生きるともアンベドカルは再びはなし
 88才佐々井秀嶺日本に来てへんろせむとす歩きたしとす
 ニ火の鳥ニは飛鳥と成りて日本の天を舞うなり夢を見るなり
 いくたびも死地を潜りてようやくに日本へもどるニ火の鳥ニにして
 ニ火の鳥ニはわれらが如き想ふかな日本史に燦然おもかげ残す
 長泉寺寿像のおわす前に来て佐々井ニ火の鳥ニ何舞わむとす
 日本の養老孟司と岡山下ササイに出遭う因果なるかな
 秀嶺は再び日本に現るかこれが最期と想い招かむ
 仁和寺に「南天鉄塔」図のあればササイ肉眼観ゆるほどかな
 薬園山ササイ画さし南天塔在るはまぼろし幽玄ならず



ナグプールの仏教徒

写真 福持英助





田口直道（空谷）さん訃報

3月29日、映像作家の田口空谷さんがお亡くなりになりました。



田口さんは1994年より佐々井上人の取材を始め、大菩提寺奪還運動の映像や当時50代の佐々井上人へのインタビュー映像など、多くの貴重な記録を残されました。南天会設立後、日本の佐々井上人関係者との交流が増える中で、私（事務局小林）も田口さんと度々お会いする機会がありました。同じ映像制作者として、大先輩のような気持ちでお話しを伺うことができました。そのようなご縁をいただき2019年11月には南天会主催で田口さんが制作されたドキュメント映像詩、『はじめての海』上映会を行いました。

私は田口さんがお亡くなりになる3日前、3月26日に田口さんのお宅を訪問することができました。その日は、すでにはっきりと声も出せない状況でしたが、お伺いしたことに大変喜んでいただきました。偶然田口さんのお兄様がおられ少し3人でお話しした後、二人でお話ししました。現在、未公開の映像を再編集して公開する準備をしており、その一編が「佐々井秀嶺 言行録2」としてすでにYoutube上で公開し、シリーズとして順次公開して行きたいと伺いました。加えて言行録をDVDにして販売したく、その制作を手伝ってほしいというお願いがありました。映像を活用することで佐々井上人の活動を支援したいという気持ちが強くなりました。途中、インドの佐々井上人にお電話し、励ましの言葉をいただきました。佐々井上人は大きな声で「6月にはお前（田口さん）に会うために帰るんだ」と何度も力付けられていました。3時間ほど滞在して、また来ますよ、と伝えて玄関先で握手をしました。それが最後のお別れとなりました。

佐々井上人は常に田口さんの体調を大変気にかけていらっしゃいました。特に、お酒の飲み過ぎについてはとても強く注意されていました。田口さんは大量の映像素材を自らで保管されていました。現在はお兄様が映像を管理され、これまで田口さんを支えてくれた方々と相談しながら映像の活用を考えて行きたいと希望されています。私たち南天会、資料室は映像保存についてできる限りの協力をして行きたいと思えます。哀悼の意を込め、次ページに、以前、山際素男さんが立ち上げられた支援会で発行した冊子に掲載された寄稿文を掲載致します。享年58。昨年よりの闘病の末、穏やかに最後を迎えられたとことです。田口さんのご冥福を心よりお祈り致します。（事務局 小林）

田口空谷君の思い出 南天会賛同人 小池一郎

20年くらい前に、私は東京支店の運営を、旧知の田口空谷君に手伝ってもらったことがあります。インド人エンジニアを増やしていた時期で、東京での彼らのケアをお願いしました。

田口君と知り合ったのは、1990年代の中頃だと思います。彼は舞踏家としてたびたび路上パフォーマンスをしていて、また、佐々井秀嶺師の記録映画を撮るために、何度かインドを訪れていたのです。彼の竹藪の中のお宅に泊まったこともあり（東京の郊外？どこだったのか…）。

彼はアーティストとしては控えめな性格で、飲む時はニコニコと私の酔っぱらい議論を聞いてくれました。

佐々井師の話になると「バンテージは…、バンテージが…」と、言い方は変ですが子犬がシッポを振るように嬉しそうに話します。今年元旦、久しぶりにインドに来て佐々井師といた私は、病床の田口君に電話して、師と話してもらいました。

「お前はオレの一番弟子だ」とのお言葉に、静かに、「ありがとうございます」と言っていた田口君。佐々井師の記録を再編集していたと聞いています。ビデオで、ずっと会っていたんですね。

安らかに眠りください。ジャイビーム。

佐々井師について第7次ブツダガヤ闘争

田口直道（映像ディレクター）

抑圧が解放へと向かうそのエネルギーの流れにいたいと思っている。できることならその流れにまっすぐでありたいと思っている。

そして、そのエネルギーの流れを現実創造している佐々井師とめぐり合えたのは「不可触民の道」の著者山際素男氏のおかげだ。山際氏と新宿でお会いしたときに、私は「いたい何を感じた方がいいのか」と尋ねた。氏は「自分を本当に生かしてくれるものを信じるのだ」と答えてくれた。私はさっそく自宅のホワイトボードにこの言葉を書いた。

私はフリーの映像ディレクターで、ブツダガヤ闘争の第5次、第6次、第7次および佐々井師のインタビュ、ナグプールでの師の日常や魅力的な弟子たちなどを撮影してきました。後世に残すべき偉大な人物を撮影できたことを光栄に思っています。

撮影の当初、いままで自分の思い描いていた「宗教的聖人」のイメージから余りにもかけ離れている佐々井師の存在に興味を持った。インドの大地を生命そのままに駆け抜ける佐々井師は、自分に課した過酷な使命を生き生きと楽しみながら果たしているようだった。師と行動を共にし撮影を進めていくなかで、私は歴史上の聖人たちの後ろ姿を見ているような気がしていた。聖と俗が混在しているある意味で欠点だらけの聖人だが、佐々井師を囲むシンプルなインドの人々はその欠点を許している。師を見つめる彼らのピュアな目は師を丸ごと愛しているように思えた。笑顔がカッコイイ佐々井師はものすごく苦しむ人もあった。自分の手に負えない苦しみを背負う義務など誰にもないがそのような苦しみと共に歩む人のことを宗教者というのだと思う。宗教者となれない私は、自分の手に負えない苦しみと共に歩んでいる宗教者の苦しみが少しでもやわらぐようにただ手を合わせるだけだ。

第7次大菩提寺奪還闘争の集会は、五月十三、十四、十五日に大菩提寺前の広場において行われた。大菩提寺の奪還を願う仏教徒たちの座り込み抗議は、佐々井師の指導のもとに三月から地元ナグプールをはじめビハール州パトナやブツダガヤなどインド各地で続けられていた。

五月十二日の夕暮れ前、酷暑のブツダガヤに大雨が降った。大菩提寺前の広場で座り込みを続けていた僧たちはテントの上に溜まった水を長い棒で押し流していた。雨が止み、白いジープに乗って佐々井師が現れた。後続のトラックには7フィートもあるアンベードカル博士の銅像が乗っていた。ジープから下りた佐々井師は疲労困憊してはいるが、興奮しているように見えた。ナグプールからブツダガヤまでの舗装状態の悪い道程を車で移動するだけでも身体にこたえるが、アンベードカル博士の銅像を運んだため、途中反対派に取り囲まれるなどの危険な目にもあったという。

到着したばかりの佐々井師に日本TVの撮影スタッフが近づき女性キャスターがマイクを向けた。「あの、日本の方ですか？菩提樹の下に金剛座に座ってしまったオーム真理教の麻原彰晃についてどう思われますか？」。佐々井師のことを知らない彼らは、オーム真理教に関するコメントを求めていた。佐々井師は終始笑顔で応対していた。一連のオーム事件の影響があるのか、キャスターは宗教的なものに偏見を持っているらしかった。キャスターの口調などから佐々井師に対しても、その偏見の目を向けているように思われた。彼らは集会については何も聞かずに去っていった。私は佐々井師のことをもつと日本人達に知ってもらいたいと思った。

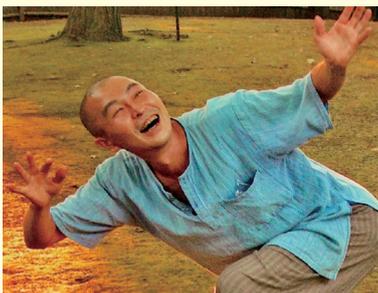
集会には前回ほどではなかったが、それでも一万人近くの仏教徒たちが集まった。アジテーション、デモンストレーション、ミュージックコンサートなど仏教僧として抗議運動をあくまでも平和的に進めようとする佐々井師の姿勢が感じられた。また、いつものごとく反対派の脅迫や警察署から何者かによって銃が大量に盗難されるという不穏な動きもあったが、佐々井師は臆せず集会を平和的に終わらせた。

十三日の夜中、佐々井師は吐血した。「悪い血を吐くのは健康にいいんです。ハハハ」と笑っていたが、師の心労が察せられる。

インドでは熱波のため多くの人が死んでいる。集会は終わったが、佐々井師の闘争はまだ続いている。ブツダガヤでの座り込みは八月まで続けられるという。闘争の詳細は後で報告されると思うが、私は文字通り命をかけている男のために何ができるのだろうか、小さな脳ミソで考えている。

佐々井師のビデオ映像の完成、一般公開は当分先になつてしまうと思うが、十一月の早稲田大学の学園祭にて小規模ながら荒く素材編集したものを放映しようと予定している。またそれ以前に素材を見たい方がいれば連絡いただけたいと思います。

（『佐々井師と出会う会ニュース第5号』より）





【佐々井秀碩資料室より】

1978年発行、アジア文化総合研究所「アジア文化」より、南天会賛同人富士玄峰老師の紀行文を転載します。

70年代のインド旅行の雰囲気がよく伝わる内容です。

ムルタイ警察署 富士玄峰

バスは高い堰堤を斜めに登りつめた。意外なことにそれはダムであった。緑の少ないデカン高原に、それも十二月の乾期に、沸々と広がる人工の湖はさながら蜃気楼の如く、白昼夢の如く眼前に広がっていた。湖岸沿いにバスは峠を登る。眼下に広がる巨大な湖は、樹木のまばらな高原の丘陵地の間に、よそよそしいまでに登みきっていた。

ビハール州のガヤから乗り込んだボンベイメール特急を、インド中央部の要衝イタルシードで、乗り換えのために下車した。前夜は待合室のコンクリートの床で、毛布にくるまって寝た。夜が明けたがゼネストのため、マドラス特急をはじめ、全面ストップのままである。仕方なく、少し心細かったが、駅前からポール登ナグプール行きのバスに乗り継ぐことにした。やがて来たバスはほぼ満席だったが、私とシンもなんと席を占めることができた。

バスはイタルシードから四番目の街、ムルタイの発着所に着いた。そこは家並の間にマンデル(ヒンズー寺院)が見える美しい小さな街であった。

出発までの間に、シンが新聞紙に包んだチャパティと素焼きの壺に入ったダル豆のジュースを買ってきた。どちらに煮たのはジュースである。だからカレーもジュースと言っている。ダルは辛くないので助かる。手づかみで食べている間に、シンは自分でお菓子のようなものとアムルーを買ってきた。この黄色い果物は、切つて塩をつけて食べると、とても美味い。食べ終えた私はシンに荷物の番をさせて、発着所の広場に降り立った。このバスの後部の窓には銃弾の穴が四つも開いていて、いやな感じだ。しかし、広場には山羊や牛が、のどかに、わずかな草を喰っている。まず、トイレを探して、広場のはずれに見つけたのだが、トイレは四囲の壁が腰までの高さしかない。あまりにも解放的で、どうにもやりづらい。下はコンクリートが便器の形状にまかせてあり、溝で壁の外へ導かれて流す水がそこらに無い。彼らは、そのたび、自分缶に水を入れて来るのだ。われわれは哀しいことに自分のモノを自分で始末できない。仕方なくそのままだったが、あとから来た人は見慣れぬ白い紙を上げしげと、不思議そうに見るのだらう。

バスに戻った私は、カメラを持って街道に出ると、丘に向かってつづく美しい屋並みを撮影するために、二・三度シャッターを押した。突然、全く突然のことに、いつの間にか近づいたのか、一人の男がいさなり背後から手を伸ばして、私のカメラをわしづかみにした。大声でわめきながら、もぎ取ろうとする。「何をするか」私も負けずに怒鳴り返して、その小肥りの男の手をふりほどこうともみあった。顔は赤黒く眼が充血していて、酒気を帯びているらしい。カメラにかかった手を振りほどいて、お前は警察官かというが通じない。ただ、カメラにつかみかかろうとする。その頃になって、騒ぎを聞きつけてまわりは黒山の人だかりである。

私は一瞬、この男が私服(○・○)かと思つたのだが、どうみてもそれらしくない

ので、長びいてはまずいと思ひ、「こいつはポリスか？」と周囲の人垣に怒鳴つたが、ガヤガヤと騒ぐだけである。すると人垣の中から、例のグリーンの網シャツを着たのが出て来た。小柄で痩せた貧相な、それでも警官らしい男に向かつて、こいつは警官なのかと、何度も尋ねた。やっと何を感違ひしたのか、オフィスはあつちだ、と街道の先を指さした。近いというのでこれは警察へ行く方が無難だと判断し、「行く」と勝手に歩きだした。ふと見るとシンが駆け寄り寄つてきて、人垣の後ろから伸びあがつて、おろおろしている。彼に、警察に行くから荷物を見張つていろと怒鳴ると、彼は人垣から離れていった。なんと警察署は、騒ぎの起こった場所から百五十メートルばかりの所であった。そこまで行く間に野次馬は七、八十人にふくれあがつた。皆、私と警官と、私が逃げはしないかとみつけているその男を取り囲むようにして、ぞろぞろとついてくる。子供たちは先づれに走っている。私はむかつ腹がたつてきた。警察に着いて、土間に入るまえに、先ほどのチビの警官が中に入つていつて何か言っている。前の広場に人だかりができた。例の男は知り合いに向かつて、興奮した口調で私を指さして何か言っている。どうせ、どっかのスパイをつかまえたとしても言っているのだらう。手を後ろに組んで、わがもの顔に出たり入つたりしているのだから、やはり本物の秘密警察か。それならまずいなあ、と内心すこし心細くなったところへ、シンがショルダーバッグとトランクを両手に提げて現われた。どうしたと問うと、バスがわれわれの荷物を屋根から下ろして、行つてしまつた、と情けない顔で言う。

私は驚いて、もうバスは無いのかと言つと、最終が一本来ると言う。それまでに事を済ませねば、こんな不愉快な所で泊らねばならない。全々、ついてないと、ますますむかつ腹がたつてきた。入れと言われ、ひとすじの土間に入ると、机の前に体格のいい若いのが、あくらかいて、どつかと座っている。私が細い床机に腰かけるので、見おろす具合になる。

私はまず、彼の雄大な度肝を抜かれた。片方で優に十センチはあるだらう。両方で二十センチはあるらうというその髭は、おまけにトウモロコシの毛のように赤いのである。隣りでは書記らしい老人が、これは西洋机にかけて、何かを書いている。他に使い走りみたいなのが二人いる。風呂屋の脱衣所にあるような戸棚にはわずかばかりの書類が雑然と置かれている。なにしろ立派な髭なので若いとはいへ、署長であろうと思ひ、空港駅、橋などが撮影禁止なのは良く知っている。先ほど撮つたのは、ただの街の風景ではないか、と釈明したが、どうもよく判らないらしい。横に例の男が座つて、憎々しげに述べている。シンにこつそり、こいつは何者だ、と訊くとニタだと言ふ。ニタとは私服刑事のことかとその時は思った。後で警察を離れてから、改めてシンに問い質したら、何のことはない、アル中の菓子屋の主人だつたらしい。そんな奴とは知らないから少しでも心証を良くしようと、珠数を取り出して、日本から来た善良な仏教徒であると述べたのだ。バスポートを赤髭と使い走りがのぞき込んで何か話合っている。赤髭は署長のくせに英語がよく読めないらしく、使い走りが読んでは伝えている。ごていねいに、アフガニスタンのビザの注意書の箇所を読んで、こいつは確かに怪しいといった風に、書記まで加わつて、時おり私の方を見やりながら相談し合っている。要するにビザというのを見たことがないのだ。

今度は手張の間からシンの写真が出てきた。以前、日本に送つて来たもので、シンがガヤの写真屋で撮つた貴重な一枚である。立派な髭がチツクで、てかてかに固

められたのを見た警官たちは、シンのカーストのことで何か厭味を言った。おそろしくシクのように伸ばした髭が許されたものではなかったのだらうか。シンは卑屈な笑いを浮かべて、へどもどししながら、それでも「ガヤの田舎の方では……」と言いかけると、赤髭や使い走りたちは、一様に軽蔑の笑いを浮かべて、フン、いなかでは、か、と声を挙げて笑つた。シンはぼんやりした顔になつたが、私の方をちらつと見て、うつむいてしまった。

赤髭がバスポートを持って出て行つた。ふと横の壁を見ると、ものすごい鉄製の枷が二組ぶち下がつている。手錠のようなスマートに光つた代物ではない。黒光りのした鎖も太ければ、嵌める輪も厚い。まさに中世の拷問道具だ。最悪の場合あれを嵌められて留置場に泊められるのではないかと、思つたとなん、胸は帳ついているもの、土間に入つて来た時の気合いが抜けて行くようであつた。すると、横に座つたニタが私の珠数を眼をやつて、よこせとばかりにつかんだ。私が渡すと、手でもんで、機嫌よきさうに油ぎつた顔にこすりつけている。私が厭な顔をする、これをよこせと眠くばせる。私が、これをやったら放免してくれるか、と手まねをする、とほけてしている。まじめそうな使い走りの男は、ニタの行為に厭な顔をしたが、見てぬふりをしてる。今や私は、命から二番目に貴重なものを奪ひ去られた、といった素振りであつた。するとニタはさらに、これは高価な珠数か、ときいてきた。そこですかさず、シンに向かつて眼くばせて日本語で、これは高い珠数だと言えと合図をするのに気の効かぬシンの馬鹿は、いつもブダガヤで珠数を観光客に売つて、ノータカイ・コレ・ヤスイを連発しているくせに、何のことも解らずポカンとしている。それはそうだらう。その珠数は二年前にシンが只でくれた安物だつたからだ。こんな安物を入れてやつて放免されるならば少しも惜しくはない。上手いければと気があせる。ところが、その私服の悪徳警官は、さすがに見破つたのか、気が変つたのか、あつさり返してよこした。

赤髭が戻つて来て、こつちへ来いと言ふ。ついて行くといふ入口を出たすぐ隣りの一室に通された。西洋机に向かつて、堂々たる体格の眼光鋭い人物がいて、こんどこそ署長らしい年配でもあるし、貫禄もある。髭はまあまあだ。バスポートの例のビザの箇所を見ている。二年前のスタンプを見て、ここへは何しに行つた、ここへはどうやって来た、と聞きとりにくい英語で質問する。それからカルカタ税関での書類を見て、カメラとハミリ、それにテーブルローダーを見せろと言ふ。さあ、後ろでそれを聞いたニタが、得たりとばかりに「テーブルローダー」と叫んだ。私がトランクの所へ取りに行つていっている間も、署長に向かつてテーブルローダーと何度も大声で言っている。今に見ている、悪徳刑事。

署長はまずカメラを見ている。日本製品のまばゆいばかりの輝きに、眼を奪われているくせに平静を装っているのが良く解る。カメラよりもハミリカメラの方に興味を示している。まず持ち方が解らない。グリッパを上にして、斬新な持ち方でファインダーを覗いている。向こうが見えて当然といった顔で、まだ威厳を保っている。「ところで、これは一体、何ルビールのかね」彼はごくさりげなく、ついでに訊くのだといった風に、カメラを机に戻しながら質問する。それきた、値段訳が始まつた。インド人は、値段訳が好きだ。ナグプールでの演説会の後で、ナークセンスクールの女先生までが値段を訊いた。「ところで、バンテ・ジー、あなたのそのカメラおいくらいたしますの？」なにも正確に換算して答える必要はない。口から出まかせ

を答えたところで高いと思うのも向こうの勝手だ。この場合はカメラの方を、うんと高く言う。そして八ミリの方はそれより安く言う。坊主とはいえ、エコノミックアニマルの国から来ているのである。案の定、署長は腑に落ちぬ顔をした。ムービーカメラのほうが良い！彼らは互いに顔を見合せている。さあ、次はテープレコーダー。「何が入っているのか」「私はヒンディーソングが好きなのでラジオから録音したのだ」「じゃ、鳴らしてみろ」「私は早稲く歌でS」のドラフトや物売りの声を隠し録りした箇所を飛ばすために巻き戻すと、スタートさせた。上手い声で言った。「これはヒンディーではない」私は驚いた。そんなはずは？耳をそばだてて聞いてみてやっとなんと解った。それは歌には違いないが、香港で録ったチャイナソングだったのだ。署長は私の説明を聞いて、こいつめ、ごまかしにかかっているなと思っただけか、ヒンディーソングはどうした、と厳しく催促する。そこで早速送り出すと、今度はシンの家のラジオから録った歌謡曲が流れた。私がどうだとばかりに署長の顔を見ると、彼はフンとばかりに、今度は裏返せと言ふ。裏表録音できるのを知っているとはご立派。さあ、こうなるなら私も何が飛び出すか保証の限りではない。裏返してスタートさせた。まず雑音が雨降りのように流れ、続いて出たのはカラスの鳴き声であった。そういえばカラスたち、大菩提会のスパ君の部屋の窓から、ガアガアと鳴き騒ぐ朝のカラスたちの声を録音した。私は思わず、にやにやしてしまっただけだ。署長や居合わせた者たち、中でも後ろで気分よかったニタもさすがに、このガアガアという鳴き声を聞くに及んで、嘩然となったようである。私がおのづから一渡り見廻した時、本物の署長が入ってきた。今度こそ間違いなく署長であって、私の前にいたのは副署長であった。素晴らしい長身で、顔つきや肌色もヨーロッパ人のそれに近い。髭もこげおどしではなく、銀色の上品な髪とともに良く似合っている。

彼は机の横の椅子に腰かけ、足を高く組んだ。それからポケットから眼鏡を出して布で拭きました。副署長の説明を聞きながら私を三度見ただけで、居丈高な眼差しではなかつた。説明を聞き終えると、私のパスポートを見た。皆が怪しいと言った箇所を一読するなり、ニコニコ笑って副署長に「君、これはビザだよ。これがないと入国滞在できないだよ。知らんのかね」とでも言ったらしい。ヒンディーかマラティダから私には解るはずもないが、副署長がパスポートを見た顔をしたのだから、きっとそんなところだ。署長は皆の前でいいところを見せたわけだ。そして一通りナグプールの滞在先きや佐々井上人のことを説明すると、諒解してくれて、カメラなどをもうしまえ、と言ってくれた。私は急いで、カメラ、8ミリ、テープレコーダーをバックに入れると、シンに持たせた。そしてパスポートや書き付けを受け取ると私は副署長に向かって「サンキュー！サー」と皮肉をこめて、たつぷりとサーを引つ張ってやっつた。副署長はそっぽを向いた。

警察と一刻も早くこの街から出たい心境だった。十人ほどの野次馬がついてくる。気がつく、またあのニタがついてくる。振り向かずには歩きながら、まだゆるするようなら仕方がない。あいつにはボールペンでもくれてやるか、と考えて足を早めた。途中で前を向いたままシンに、ニタがまだついてくるかと訊くと、シンは振り返って来て、もう来ないと言った。その通りだった。しかし、まだまだ気は許せない。バスの広場に戻って真中にトランクを置いて、それに腰をかけた。さすがに緊張が緩んで疲れがどつと出てくる。シンはと見ると、情けない顔でぐつたりとしゃがんで

いる。また、たちまち野次馬が二重三重に取り巻いてしまった。それる二メートルほどの距離をおいて円陣を作っている。腕ぐみをして、ガラス玉みたいな眼をまばたきさせずに、じっと立っている。実際あの無表情な眼を見ると節穴としか思えないで、いらいらしてくる。疲れで忘れかけていたむかつ腹が、またよみがえってきた。この円陣を崩してやろうと思ひ、立ち上がって歩いて行き、後ろ向きに円陣の中に入り込んだ。私も野次馬の一人になった訳だ。シンとトランクを中心にした輪に私が入ると、皆は磁石が反探するよう私から離れる。円陣が私のそばから崩れ始めた。次々と二人一人に寄って行って並ぶと皆そこそと離れて行く。私はここにこ笑いながら円陣崩しを続けた。そんな私の様子をシンはしゃがんだまま放心したようにばんやり見ている。

中には私が横にくついても意地を張って、腕組みをしたまま動かないのがある。顔付きは普通なので、私が肩を組んで、やあやあど揺さぶると身を固くしながらもにやっとなんと笑った。皆も笑っている。それで円陣崩しのお遊びはよしにしてトランクの所へ戻って腰をおろした。また円陣ができてしまった。その時、一人の男が私の前に立った。

珍らしくシャれたスポンをはいた長身の若い男で、伸ばしたもみあげと髪型がアメリカの黒人と思わせる。「おまえ、カメラを持って来たって、どんなカメラだい、ちよつと見せてくれ」「ノー、それはできない、断つても、しつこく言つ。こいつ、おかしいな、と思つて、トランクにかけたまま、見上げると、この若い衆は、腰のベルトに自転車のチェーンを縫いつけている。ゴロツキらしい。見せたが最後だと思ひ、シンに日本語で「こわい」「あぶない、あぶない」というと解つたとみえて、気付かれぬようにシヨルダーバックの上にはしゃがみこんだ。さきほど、カメラ類はバックの中に入れた。チャックだけだから開けられたらおしまいだ。そこで、さもカメラがトランクに入っていて、しかも鍵がかかっているのだと思わせるために腰かけたままトランクの二つの鍵を押さえて、うん大丈夫、ロックしてある、という顔をしてみせた。男は、未練そうにすこんでいたが、いつの間にかいなくなつた。

そうこうするうちに、広場のはずれにある切符売場と休憩所をかねた家から人が出て来て、こつちへ来いと呼んでくれた渡りに舟と、休憩所に入ると、しつかりしたような人々が五人ほどいて、近寄ってくる野次馬を追い払つてくれた。部屋の半分は台のベッドが置いてあり、半分の土間には木の長椅子が並べてある。杖をついた老人が入って来て腰をおろした。この家の主人にわれわれのことを聞いている。今日は一体なにがあつたんだ。この旅行者がどうしたんだ、といったぐあいだ。主人が説明すると、たちまち老人は顔をしかめ、さも苦々しげに「また、あいつが、本当に困つた奴だ」と言つたように見えた。それから私も何か二言、三言いった。同情してくれていることが、その眼差しでよく解つたので私は老人の好意にうなずいた。こうしてみると、あのニタはこの街で札つきの嫌われ者らしい。大変な奴の前で写真を撮つたものだ。

イタルシーからのバスが来た。急いで乗るために私とシンは飛びだした。広場は降り降りの人でごたごたがしている。シンはバスの屋根によじ登って、積み上げたトランクを確認している。気がつく、広場の入口の方から署長と副署長が並んで大股に歩いて来る。二人は広場の群衆から離れたところを、さりげなく横切つて去つて行った。こちらを見ればしなかつたが、様子を見に、いわばわれわれのために睨み

を効かしてくれたのだろう。

バスは乗客をすしづめにして、日も暮れかかる時刻に広場を出た。警察署の横を通り、坂を登りつめるとムルタイの家並みは跡切れた。見渡す限り雄大な丘陵地帯が広がっている。バスは地平低く傾いた陽ざしの中、丘陵のゆるい勾配を砂ぼこりを巻き上げながら突っ走る。

酷い混方だったが、幸い私もシンも腰かけることができた。車掌はとても威張つていて、通路に立つ人びとをこづきながら、ぎゅうぎゅう詰めていく。ここでは乗客は乗せていたでいいので小突かれても皆はおとなしい。途中で瘦せ細つた老人は耐えられず、うずくまってしまう。じつは私が座れたのも、席を譲ってくれた人がいたからだ。その人に向かって大層な声で「シェークリアー」と礼を言つと、彼ははじかれたように厳肅な顔になり、合掌して返した。あなた神のご加護がありますように、というようにニュアンスだから、彼らが改まるのも無理はない。しばらく行くとき少し人種の違う感じがする人たちがたくさん乗って来るようになった。小柄で顔も貧相で態度も気のせいとおどしている。女性のサリーの着方も少し違ふところがある。手や足にやたらと大きな銀製の輪を嵌めていて、重そうですらある。皮膚も象のように皺が多い。これらのドラヴィダの一種族であろうか。彼らはいいて年寄りでも、立つた通路にしゃがんでいる。

振り返ると、シンが座席にもたれて口をあんぐり開けて眠っている。さきほどまで、互いに顔を見合せては、大きな溜息をついて本当にくたびたなあ、といった表情をしたものだ。私も緊張が解けて、疲れが一度に出た。ほんのしばらく居眠つたらしくつた。大きな揺れに目覚めると、まさに巨大な太陽がインド亜大陸、デカ高原の大地の真中に落ちようとしていた。隣りの窓際にいた青年は、じつと夕陽を凝視していたが、頭に巻いた手拭を取ると前の把手に顔を押しあてて祈り始めた。夕陽に染まったその横顔は精悍で、とても敬虔な姿であった。太陽が大地に吞まれた瞬間から急速に白晝は夜の闇へと深まり始めた。地平にはオレンジ色の光が漂い、地表は冷え始め白い霧が生まれる。丘陵の重なる黒い影が、みるみる闇に溶けてゆく。乗客の中には私と同じように、ストのためにやむを得ず慣れないこのバスに乗り合わせた人がいて、土地者の中に座って不安そうにキョロキョロしている。窓の外が闇に包まれてしまつてからは、いっそう心細くなるのか、上等の背広を着込んだ親娘づれは、娘を父親がじつと抱いて、ときどき窓に顔をちかづけては街の明りが見えはしないかと窺っている。十才ぐらいのその娘は、私がバスに乗り込んだとき、彼女の座席の下にバッグを押し込もうとしたら、「ネヒン、ネヒン」と、きつと拒絶していた。私がときお笑いかけても、怖いものでも見るようにして父親の腕にしがみついている。それほど若くないインテリ風の父親も、私の視線に気付くと眼鏡の奥から不安そうな眼差しで、おそろく見たこともない眼の細い皮膚の黄色い私を一瞥したりした。

バスはそんな私たちと土地の者をすしづめに詰め込んで、弱々しいヘッドライトを頼りに、ほこりつばい闇の中を、ナグプールめざして走り続けた。

(ナグプール・ブッディスト・センター住職)

インドの小さな農村の仏教寺院

カオラプール寺院



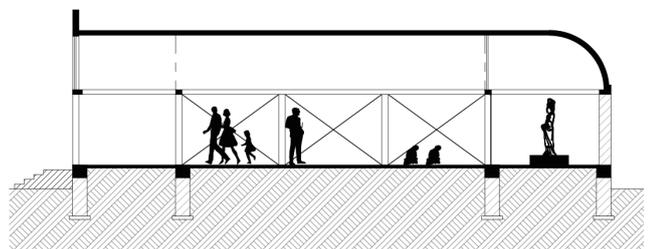
インドの街には、ヒンドゥー寺院やイスラムモスク、キリスト教会、シーク教グルドワラなど、多種多様な宗教が一目でわかる宗教建築が建っている。これらの宗教建築は、雑多な街の中で、宗教のアイデンティティと、コミュニティの存在を分かりやすく主張している。マンセル・カオラプール寺院でも、仏教徒の村のコミュニティのために、一目で仏教寺院とわかるデザインを目指した。過去の仏教建築をみると、初めにサンチーのようなストウーパがあり、次にストウーパの前で礼拝をする人の為にアーチ屋根をかけた寺院となる。これが仏教徒の集会場の原型と考えた。また、仏教石窟寺院の入口には、アーチの断面を飾ったシンボルがある。これをシンプルかつモダンに再設計し、寺院の正面に採用した。



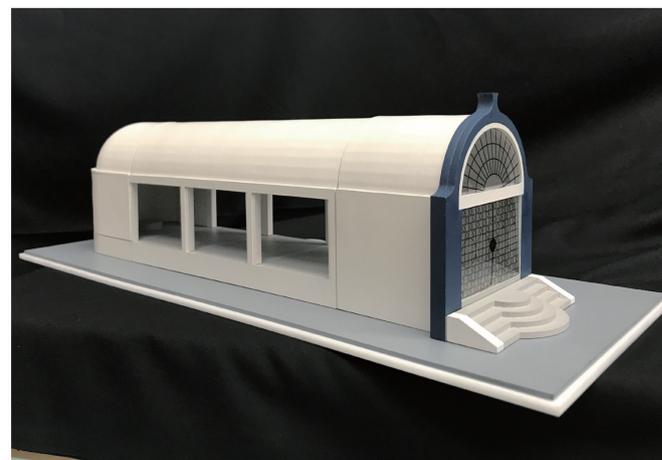
また、仏教徒が自主建設をするためにコストを抑えたシンプルなデザインとし、インドでの一般的な建設技術のレンガとコンクリート造として、特別な技術がなくても建てられる様にした。実際にかかった建設コストは70㎡で140万円と平米あたりで2万円程度（1坪7万円）であった。できた建築の中に入ると、床から反射した光がアーチ天井にあたり、アジャンタやエローラの石窟寺院と同じ様な柔らかい光となっている。私は、この柔らかい光の下で、人々が集い、祈る場所になることを期待している。また、現在、近隣で宿坊を含んだ寺院の計画が、日本在住のインド人仏教徒により計画が進んでいる。こちらも基本的なコンセプトは踏襲し、宿坊として生活と祈りの場が合わさった建物を目指している。



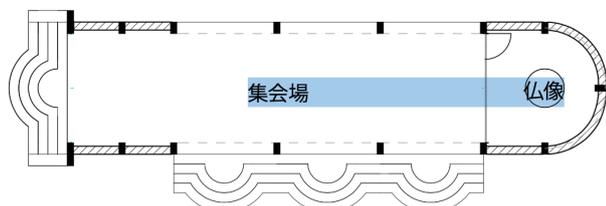
建築家 飯田寿一



断面図 1/200



カオラプール寺院模型（全景）



飯田寿一 1級建築士。1980年石川県生まれ。東京理科大学大学院卒業。2009年からインド在住し、パドマシュリを受賞したインドの現代建築家B・V・DOSHI事務所、竹中工務店インド法人で勤務。現在は日本在住。佐々井秀嶺師と知り合い、お寺を建てたり、幾つかのプロジェクトをお手伝い中。

南天会会費・支援金(2022年12月1日～2023年3月31日) **854,616円**

【特別支援金寄付者ご芳名】

※上記期間中に年会費以外で支援金をいただいた方のお名前です。

赤木宥子 飯田寿一 池田昌哉 池田裕司 伊東薫雄 伊藤友人 宇佐見聖弘 遠藤暁及
大前英 岡本博子 荻須眞教 笠間研成 雁金千夏 岸信一郎 城戸佳織 小池幸共
西部法照 小林三旅 佐伯隆快 坂田雅子 坂田龍晴 嶋崎実 浄泉寺遊亀仏教婦人会
下村栄美 新城晋一郎 新城さやか 杉本玄海 鈴木まき 曾我逸郎 高橋穹壯 竹原路晴
土岐信子 時任茂 殿元健照 中川豊俊 中原永昌 中村寛 並河正人 西田光子 西村馨
西村和代 平野文興 福瀬くに子 本多末男 前田卓幸 松田龍児 三島史津子 民部孝
森井伸幸 山崎吉貞 山本和邦 渡辺典子 (五十音順 敬称略)

その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

佐々井上人が設立したコンダサワリ病院運営維持支援金

49,763円

※2/25～3/15の期間でシンカブルにてキャンペーンを行いました。

(寄付者) 青野陽子 阿部郁子 伊藤憲子 宇田川祐子 梶原正臣 小池一郎 酒井映美
佐藤力 佐藤茉莉奈 佐野誠 鮫島有加 武田英敬 寺尾純 日景里美
日高瑞希 樋口美恵 松田龍児 吉田知里 (五十音順 敬称略)

コンダサワリ病院に医療器具を贈呈いただきました

沖縄菩提樹苑の長嶺信夫医師(2019年来日の時に訪問、龍族16号に記事)より、コンダサワリ病院で使ってほしいと医療器具数点をお預かりしています。ご自身が経営される病院が閉院となるため、高価な医療器具をインドにお送りします。輸送すると輸出品になってしまうため、ナグプールに行く予定のある方が、医療支援の一環として手荷物に加えてお届けいただければと思います。ご協力いただける方は、南天会事務局までご連絡ください。

※支援金は、佐々井上人の要請に従い順次インドへ送金しております。

12月30日 50万円 / 3月6日 20万円

※佐々井上人来日に関わる飛行機代や滞在費用のご支援お願いいたします。

※龍族バックナンバー、関係書籍・DVD頒布いたします。事務局までお問い合わせください。

あたたかいご支援ありがとうございます

◆南天会現況(令和5年4月1日現在)

正式会員数 218名

龍族発送者 382名

※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人(50音順)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月(釣月庵庵主)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

小野重徳(仏国土の会会長)

黒澤雄太(剣士・日本武徳院師範)

小池一郎(株式会社マクスエンジニアリング常務執行役員)

島影透(株式会社サンガ社長)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

土屋信裕(顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

宮本龍勝(佐々井上人お弟子)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。

※他金融機関からの振込用口座番号

店名(イチサンキュー) 一三九店(139)

当座 0090164

会員種類と年会費

支援会員 10,000円(会費+支援金)/年

一般会員 5,000円/年

学生会員 2,000円/年(※大学生まで)

※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。

一般会員令和2年入金済→ 一般R2

Syncable (シンカブル) から寄付ができます

オンラインで会費や支援金の決済ができる寄付プラットフォーム Syncable に団体登録しました。インターネットで Syncable を検索していただき、「団体を探す」→「南天会」で寄付ページを開けます。各キャンペーンも行っておりますので、ご参照ご紹介ください。

Syncable (シンカブル)QR コード



【龍尾言】

3月に4年ぶりにナグプールに行きました。懐かしの風景に感動、と思いきやメトロ(都市交通)が完成していて雰囲気が一変。高架の上に電車が行ったり来たり、電車がある風景はなぜかグッと東京の下町の風情になります。環境対策でプラスチック製品の規制が進み、チャイのカップやビニールのレジ袋が紙や植物由来ものとなり、町がずっと綺麗になっていました。紙なら牛や犬が食べても一応は安心です。タクシーもUberをスマホで手配できるので値段交渉の手間もなくなりました。人々にも余裕を感じます。もはやインド旅行も快適な時代なんです。(小林)

南天会事務局



〒179-0075

東京都練馬区高松 4-16-3-102

小林三旅 (090-4538-2677)

佐伯隆快 (090-5304-8955)



メール nantenkai@gmail.com

南天会フェイスブック・ツイッターご利用ください

